



芭蕉翁終焉記

全



25 75
1829

1829

芭蕉翁桃青居士

續下馬記

江州栗津 義仲寺

芭蕉翁桃青居士
義仲寺
栗津

衰翁松風画

一景

一景



右蕉翁像者
古人松風氏
所寫也今懸
某子高東都
岷雲再摸之

十
一
一
一

芭蕉翁終焉記

芭蕉翁終焉記
予、東山、冷、い、海、納、凍、の、地、を、こ、こ、人、濕、を、
う、も、く、お、も、秘、に、枝、を、お、じ、つ、け、る、を、秋、を、
つか、し、い、を、伝、ふ、物、を、つ、ま、じ、ん、ん、を、も、も、か、く、も
か、う、く、も、や、ま、の、枯、尾、を、と、吾、常、閑、奥、の、村、に、う、話
り、よ、く、い、候、り、く、も、う、隔、く、今、年、乾、中、者、春、を、
歌、あ、つ、し、柳、枝、を、お、孤、獨、を、貧、窮、を、い、い、遠、世、業、に、あ、り
て、予、等、を、も、た、り、二、子、餘、人、の、門、業、を、さ、を、い、い、り、

芭蕉翁終焉記

ふたりの心もあはれいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて

さる茶の相成株のそと多しう先はよるやあはれ
風おこころいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて
なほいふはなれはなれとて

此表
にあり

一生は播磨のりてついでにける一生涯とていふに四
つは終つて深川の流と又志をこころも昔や華々
老と信人も信あふまきとほり心志をわかくとん
かへ海へてあふひ信笑の古郷とていふに
なまらうの軍家とていふあふまきとていふに
津の國なるふまきとていふあふまきとていふに
まありとも信あふまきとていふあふまきとていふに
子とていふに信あふまきとていふあふまきとていふに
海のそとにけるも信あふまきとていふあふまきとていふに

残帳より有り者あり一箇の塊積よりある也とていふに
けをれい信のそとにけるも信あふまきとていふあふまきとていふに
あき世に病なむけとて物も力もあふまきとていふあふまきとていふに
とていふあふまきとていふあふまきとていふあふまきとていふに
正秀大信より本許にわあ州平田の孝由つとていふあふまきとていふに
惟然とていふあふまきとていふあふまきとていふあふまきとていふに
とていふあふまきとていふあふまきとていふあふまきとていふに
詞つとていふあふまきとていふあふまきとていふあふまきとていふに
の耳より入らるあふまきとていふあふまきとていふあふまきとていふに

多々務麻下あまこしのひこねあまていけのあまを家縁
とつ不だま坐禪跡をかくくまきしむらりの執母しに絶じ
つうしあまぬてうこしりて能信のよんと失ひつひは思ひ思
屋ふべのあのみあつ存昔治と々文るし川東南西北の根
もそつおの極とて定のる方のと物奥松島城のりく山
ふしぬそくしあまうくまめくくまの終るくまりの終る
んし一ねもせひてだまひの凡といふまふ中まて此始めい
ぬいへの思ひくそくも地とるよと先終るまて伏見ま
おしりまてあまゆまねしして葬礼並儀とありし系大坂大

は播磨所の建礼披官後まてく此おの情と慕るまて絶
まらぬ来るまのまを系人まて清むまの外智月しあま
絶まてまを系しけりまあまの直愚上人と導りてつあ
の女引入る所まこのまてく本音塚のおまおくまて土ふま
まめくまのつうまありまら柳も有るまの暮のらまらま
まはまらま卯塔ままひあま地まら先ま地まらまらま
極まらまのつうまらまらまらまらまらまらまらまらま
あまら所まらまら山田上山まらまらまらまらまらまらま
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

為さ青と湖との自と無しはるるをあるある也
くしせいの程こそよくよくと進歩の興りなきは
ふふいふやうなるいふ人このふけあを合戦して
新島の記と述べてはかこ程もなるふ同のつくり
家箱と云のりし事いふとてそ回向の徳とてし

於栗津義仲寺牌位下

晋子書

昔元禄七甲戌歲十月十二日

栗津義仲寺

